

岡山県医師会女医部会報

第13号

第1回 ドクターズ キャリアカフェ in OKAYAMA

(岡山県医師会主催 女子医学生・研修医をサポートするための会)

日時：平成23年9月10日(土) 14:00~16:00

場所：岡山大学病院 入院棟11階カンファレンスルームC

岡山県医師会 理事 神崎寛子

ドクターズ キャリアカフェ in OKAYAMAは医学生、研修医、専門領域を研修中の若い医師たちのキャリアアップの手助けをしようと始めた事業です。第1回目は女子医学生・研修医を対象とした会を開催いたしました。

学生時代から女性医師としてのキャリアアップを考えていきたいという女子医学生のサークル、山口大学の「en-JoY」と岡山大学の「MUSCAT Jr.」のメンバーに集ってもらいジョイントミーティングという形で開催いたしました。活動の先輩である「en-JoY」と、彼女たちに啓発され活動を始めた「MUSCAT Jr.」ですが、これからもお互いに情報交換をしながらさらに活動を発展させてくれそうです。偶然ですが「en-JoY」の初代代表が岡山大学で研修医をしており、彼女も会に参加してくれました。

講演は岡山大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚科学准教授 青山裕美先生にお願いいたしました。学生の皆さんには、女性であっても大学でトップを目指してほしいという思いを込めて天疱瘡の研究で世界的な第一人者である青山先生に、研究が楽しくなった課程、研究をしていて良かったと思うことをベースにお話をいただきました。青山先生はMUSCATプロジェクトの企画委員会のメンバーで、日本皮膚科学会の「皮膚科の女性医師を考える会」の主要メンバーでもあり女性医師がプロフェッショナルとして働き続けるために様々な活動をしていらっしゃいます。

青山先生と学生の皆さんからいただいた抄録は県医師会報 第1319号 平成23年10月10日号に掲載しております。この度は医師会報に掲載できなかったグループディスカッションの部分と、私の学生さんたちへのメッセージを紹介させていただきます。グループディスカッションはあまりにも楽しかったので講演録風に掲載しました。その場の雰囲気や少しだけでも感じていただけたらと思います。



グループディスカッション

片岡先生：

今日は山口大学をはじめ、関西医科大学、そして岡山大学MUSCAT Jr.のみなさん、多くの先生方、本当に全国から暑い中ご参加頂きましてありがとうございます。

先ほど松谷さんの方からMUSCAT Jr.のお話がありましたけれども、我々岡山大学では平成19年から「女性を活かすキャリア支援計画」ということで女性医師、医学生の支援を文部科学省のプロジェクトとしてやってきました。プロジェクトを提出する時に審査があるのですが、大体40大学くらいから申込みをして、うち9大学が選ばれたのですが、何とか岡山らしさをアピールできる名前がいいなということで考えたのが、岡山といえばマスカット。意味は、「MDs and Undergraduates Support & Care Attractive Women's Team」で、「学生と女性医師がお互いにサポートしてみんなで支えあっていきましょう」ということでMUSCATの活動を始めました。その後平成22年からは岡山県から委託事業という形で経済的な支援を頂いてMUSCATプロジェクトを続けることができます。

私たちは岡山県医師会、岡山県等県内の色々な女性医師支援を行っていらっしゃる様々

な団体と協働するということが非常に大切だと思っています。同様に大学間のつながりや学生間のつながりは本当にすばらしいことだと思っています。そういったことがどんどん活発になっていけばいいなと思っています。

今日のグループディスカッションは神崎先生の方から症例ディスカッション形式でということでしたので、ケースの提示から始めていきたいと思います。このケースから問題点を抽出して行って、どうしたらよいかというのを各グループで話し合ってもらって、グループごとに発表して頂きたいと思います。このケースにとらわれず、もう少し広げて考えていただいても結構です。15分くらい集中して考えて頂いて、それから各グループに発表して頂きます。

症例提示

ケースは岡山医科大学医学科5年に在籍する22歳の女性Y。主訴は将来についての不安です。彼女は自宅通学で、同じ部活の同級生と1年生の秋から付き合っています。彼女の誕生日に彼氏から「二人が一人前になったら結婚しよう」と言われ舞い上がる気持ちになりました。病院見学に行ったりしながら研修先の検討をしましたが、彼女は臨床実習で教えてもらった尊敬する皮膚科のA先生の下で将来専門研修をしたいと思い、卒業後臨床研修は岡山医科大学病院でしようと思いを決めました。彼氏もそのことを了解してくれ、一緒に岡山で研修をすることにしていました。ところが、ある日突然、彼氏から「俺、研修は東京に行くことにした。東京で研修してくれないか?」と告げられました。彼氏の父親が過労で入院したそうで、「好きにしていよと言ってきていた親だから、こんな時こそ自分に何ができるか考えないといけないと思う。」という彼氏の言葉に彼女は驚いてしまいました。「二人が一人前になったら結婚しよう」とは言われましたが、結婚時期など具体的なことは全く見えていませんでした。「こんな状態で東京に行かなければ二人は別れてしまうかもしれない。尊敬するA先生がいるから岡山で研修しようと思ったのにこのまま見知らぬ土地の病院を選んで良いのだろうか?結婚して子供ができて、東京には頼れる人もいない。本当に今の時期に将来を決めてしまっているのだろうか?」彼女の悩みは様々です。

Yの不安

- ♥Mとは「二人が一人前になったら結婚しようね」とは言われてたけど、まだ自分の中では具体的な結婚の時期までは見えていなかった。でも、ここで東京に行かなかったら、Mとは別れてしまうかもしれない。
- ♥でも、私は岡山で研修しようと思っていたし、尊敬する先生もいる。このまま彼についていっているのだろうか。
- ♥結婚して子供ができて、東京には頼れる人もいない。本当に今人生を決めてしまっているのだろうか?

ディスカッションの報告

グループC

私たちのグループで確実に言えることとしては、結婚しないで研修先を別々にした場合、まず間違いなく別れるだろうと。学生のうちは、「もし研修先が別れても2年後にうまくいっていたら結婚しよう」という話になるのですが、私の同期のことを考えても研修先が異なるカップルはみんなことごとく別れています。どうしても研修を別々にしたいのであれば、まず結婚をしてから別々の研修先に行くというのも一つの手かなと思います。ここで結婚しなければまず間違いなく別れます。でも結婚はすぐできないけど別れたくもないし…というのであれば研修先は同じ場所にする方が安全・安心かなと思います。女性は妊娠・出産・子育てもありますので自分の家族の近くにいるというのはすごく心強いので、それとの自分の中での重要度を考えて、単身彼氏について行くか、自分の家族のいる岡山に残るか、というのを比べてそこの重要性を見極めるのが大切かなと思います。

もう一つ、この子(Y)が岡山に残るのを選ぶ理由としては「皮膚科のA先生がいるから」というのがすごく前面に出ていたのですが、そういう1人の先生がいるからという理由で岡山を選んでもA先生はすぐ開業してやめるかもしれないし、医局人事でA先生が異動になるかもしれないし自分が移動になるかもしれないわけです。A先生とのやりとりはメールや手紙、電話だけ。そうすると自分が遠方に行ってもそれほど変わらないのかなと思います。なので、それだけで自分の進路を決めるのはちょっとやめた方がいいかなと思います。

青山先生から今回気になった点として、この彼氏は彼女のキャリアのことを全く考えてない、「これは男としてどうなんだ!」ということが上げられました。自分のキャリアのことも考えてくれる優しいパートナーを改めて見つけるということも一つの手かなと思います。


片岡先生

すばらしい意見でした。彼氏に対する辛口な意見も確かにその通りですね。

グループD

岡山に残るという選択をする場合ですが、前のグループに出ているように確かに別れる可能性もすごく高いと思うので、そこはキャリアを重視して選ぶのもいいかなと思います。そして、女性なので結婚して妊娠出産のことも考えると家族のいる岡山にいるの

グループC



- ♥結婚せずに別の病院に行くと「別れます」
- ♥結婚してから別の病院に行くのもあり
- ♥将来のキャリアを考えて
- ♥A先生は異動したり、自分が異動したりすることもあるので、それだけで決めることはやめた方がいい
- ♥彼氏は彼女のキャリアを全く考えてない。男としてダメなんじゃないか
- ♥自分のキャリアのことも考えてくれる優しい男性を探したほうが!

はとても大事なかなと思います。

そして東京に行く方なのですが、卒業まであと1年あるので、東京に行く前に彼氏の方の家庭を見るのが大事なのではないかなと思いました。研修の2年間だけ東京に行くことにして、その間に相手の方のお母さんやお父さんに会って、もし将来結婚して彼氏の実家の方に住むとしてもうまくやっていけるのか、妊娠・出産したりしても子どもの面倒を見てもらえるのかとかを仕事に就く前に確認したらいいのではないかなという意見が出ました。そこであまりうまくいきそうになれば岡山に戻るのもありかなと思いますし、そこら辺のことはまた2年後に考えるべきじゃないかなと思いました。

また、他の意見として彼氏がいるからとか先生がいるからというよりも、自分の研修がどこだったら一番よくできるかというのを岡山でも東京でもしっかり探して、そこで本当に一番良いところに行く方が、後々の自分のキャリアのことを考えていく上で後悔が一番ないと思いました。以上です。

片岡先生

最後のキーワードよかったですね。何かがあるから、誰かがいるからではなくって自分の研修が一番よくできる所を選ぶということがすごく大切だということですね。

グループE

私たちは、結論としては「どこにいても大丈夫。」だと思います。結婚されて旦那さんについて行かれてそれから戻ってこられてお二人で開業されているという三宅先生の経験を聞きましても、実際どこに行っても今は社会的な支えも発達していますし、長期的な目でみて目先のことにこだわらない方がいいと思います。最終的には行って見なければわからないので、まず行ってみて無理だったら人生経験が積めたと思っていつでも帰ってきたらいいのではないかなという意見です。何事もプラス面に目を向けなければ先に進めないと思います。尊敬する先生がいらっしゃるからという理由がポイントとして上がっていましたが、千葉にもきっと尊敬できる良い先生はいらっしゃると思いますし、自分が行く意味というのを自分で見つけて、旦那さんだけでなく「私がど

グループD

- ♥ キャリアを重視して岡山を選ぶことも大切。妊娠出産を考えることも大事
- ♥ 東京に行く前に彼氏の家庭をリサーチすべき
- ♥ 2年間だけ東京に行くことによって、将来結婚した時にうまくやっていけるのか、など将来のプランも綿密に立ててはどうか。うまくいきそうになればその時点で岡山に戻ることも
- ♥ 彼氏がいるから、先生がいるから、ということではなく、自分の研修が最もよくできる場所を選んでどうか

グループE

- ♥ 結論から言うと、「どこへ行っても大丈夫！」結婚して夫について行って現在二人で開業された経験等をお聞きした
- ♥ 目先にこだわらず先をみる
- ♥ 行ってみないとわからない、ダメなら帰ってくればいいじゃないか
- ♥ 何事もプラス面に目を向けよう
- ♥ 尊敬する先生は千葉にもいるかもしれない
- ♥ 自分が「どうしていきたいか」を大事に

うして行きたいか。」という理由を付けて行くと、また一つ違ってくるのではないかと思います。結論としては「行きましょう。」という感じでまとまりました。

片岡先生

すごくポジティブな感じで、行ってみなければわからない、でもそういう感じで何事もポジティブに選ぶことによって本当に後悔なくいけそうですね。勇気付けられる感じがしました。

グループB

Bグループでは、結論から言いますと、彼についていこうということにまとまりました。でもこの女子医学生の方は岡山に残ってやりたいこともあるというかんじなので、彼の希望に従ってついていくというのは若干ひっかかるころはあります。男性医師の意見から、自分の意志を曲げてついて来られるとちょっと重荷になるというお話もありました。休みとかを合わせれば研修を別々の場所にしたとしても「まあ何とかやっていけるかな」と思い、それもいいかな。」と思ったのですが、周りで聞いてきた話ですと研修の場所がバラバラだと別れてしまうことが多いということ、しかも5年間も付き合っただけから結婚しようと思っている彼と別れてまた新たに探すというのもちょっとしんどい感じがします。小山先生は旦那さんについて海外に行かれて、ちょっと遅れて研修をされて開業をされてという感じで旦那さんに合わせて来られましたが、ちゃんと自分のやりたい事は全部やったかなと言われていきます。その時は彼氏に合わせて自分の夢とかをちょっと諦めちゃったりすることになるかもしれないけど、行ったら行ったでそこでまたいい出会いもあったりしてやりがいがある仕事も見つかるかもしれないし、場所に限らず医師という仕事はできますので、Bグループとしてはついて行くということでまとまりました。

グループA

Aグループでは、まだ彼と結婚するかどうかわからないので、Yは岡山に残りたそうなので岡山に残るなら残って、まだ若いのでもう少し考えてみたらいいのではないかと結論になりました。

ちょっと個人的な意見ですが、でもそんなに好きだったらきつとついて行くんじゃ

グループB

- ♥結論「彼について行こう」
- ♥女子学生は岡山に残ってやりたいこともあるが、彼氏の希望に従うことにひっかかりはありそうだが、自分の意志を曲げてついてこられると重荷、という意見も…離れていてもなんとかやっていける、という意見も。
- ♥しかし、「距離の遠さ」が別れることにつながる。今更探すのもうしんどい？小山先生は旦那さんについて海外に行って…、と合わせていてもやりたいことは全部やれたという意見。
- ♥その時は彼に合わせてとしても、そこでいい出会いややりがいのある仕事が見つかる。場所に限らず医師という仕事はできる。

グループA

- ♥結婚するかどうかわからないので、岡山に残るなら残って、まだ若いのでもう少し考えてみたらいいのではないかと。
- ♥でも、本当に好きなら、ついていくんじゃないのかな？姉も相手について行ったし、そんなものかもしれない…
- ♥自分のやりたいことも大切だが、好きな人に出会うのも人生。優先順位をつけ、本当に自分の思うように選んでいくのが大切。
- ♥最近では二人で同じ病院で働くこともある。対等な二人としてともに働ける場所を選んでよい。

ないかなと思います。姉がいるのですが、実家に帰ると言っていたのに、やっぱり帰らないと言い出したことがあったので、そんなもんなんだと思って… 自分のやりたいこともあると思いますが、やっぱりそれほど好きな人に出会うというのも人生なので、そこは優先順位をつけて自分が思うようにするのがいいと思いました。

あと先生のお話で、最近夫婦で一緒に同じ病院に入って働いてらっしゃる方もいるとお聞きしましたので、別に東京、岡山だけで考えるのではなく、一緒にいたいなら一緒に働ける場所を探すというのもありなんじゃないかなと思いました。

片岡先生

ありがとうございます。たぶんすごく難しい課題だし、いろんな意見が出るだろうなと思っていたのですが、基本的について行くにしても岡山に残るとしても自分がこうしたいというポジティブな考えで自分の心からの選択だったらうまくいくし、どういう選択であっても自分が決めて周りの環境整備をするということが大事なんじゃないかなあとみなさんの意見を聞いていて思いました。

会を終わるにあたり学生さんたちへ

夏に秋田で行われました第7回男女共同参画フォーラムで基調講演をされました内閣府政策統括官(共生社会政策担当)の村木厚子さんからいただいたコメントを4つ紹介しました。第一点は女性には先輩が少ないので様々なロールモデルが必要だということでしたが、私どものこうした会もその手伝いの一端になればよいと思っています。

次に結婚や出産を機に楽な仕事を選ぶべきではないということです。「両立することはしんどいことなので本当に好きな仕事でないと両立できないでしょう」というメッセージです。三番目は子どもを持って働くという負い目を軽くしてあげなければならないと言われました。村木さんが子どもを持って一番よかったのは危機管理の手法を子育てで学んだことで、「勝つ必要はない、負けなければよい。」と思うことだったそうです。彼女が不幸にして巻き込まれた冤罪事件の拘留時も日々をこうした思いで乗り切ってきたそうです。最後は指導者への言葉ですが、重要なポストへの昇進はさせてみるしかないということです。抜擢された当人は成功するのは本人の実力、失敗は人事をした上司の責任と思い、ポストを受けなさいということでした。

「自己実現的期待」という言葉があります。経済学用語ですが、期待したように結果が付いてくると意味の言葉です。高い期待を持てば良い結果が付いてくるという好循環をバーナード・ショウの戯曲の名前をとりピグマリオン効果と呼びます。一方、期待が低いとマイナスの自己実現が起こります。「どうせ…だから」という思いは悪循環をもたらします。「どうせ女医だから」と思うことなく、ぜひトップを目指して努力していただきたいという思いを学生のみなさんに送りたいと思います。

ドクターズキャリアカフェに参加して、 続けることに意味がある

三宅内科小児科医院 三宅 眞砂子

会に参加してまず感じたことは、学生さんたちが真面目で将来のことについてしっかりと考えていることでした。女性が結婚・子育てをしながら仕事を続けていくということは、昔ほどではないにしても今の日本でも大変なことです。特に病院勤務の場合は、当直があり時間外勤務という概念さえない非常識が常識の世界です。しかし、女性医師の数は増えており、さらに増加すると考えられます。今までの働き方では病院の運営もできなくなって来ています。

私は、卒業後すぐに岡大麻酔科に入局し4年間勤務しました。この間、産前産後の休暇をいただき二人の息子を出産しました。下の息子を出産後は、夫の転勤で岩国に行きました。1年間子育てに専念後、医局に入局することなく当時の院長のご厚意で小児科の研修医として2年間、その後レジデントとして8年間勤務しました。当直はなく官舎住まいで、隣が院内保育所という環境でした。給与は看護師以下でボーナスはありませんでしたが、症例は多く非常に勉強になりました。

平成元年に、私の地元総社で、夫は内科・私は小児科で開業しました。総社市は人口六万七千人余り、年間出生数六百人弱の小さな市です。医師の数も少なく、校医や園医・健診など行政や地域での役割が回ってきました。始めは負担に感じていましたが、診療所で診る病気の子どもたちとは違う、地域での健康な子どもたちの様子を知ることができ見方が広がりました。

子育ても終わり、診察室にのみ閉じこもっては限界があることに気づき、何か地域に貢献できないかと考えるようになりました。平成17年7月、県と保育サポート「あいあい」の協働事業に参加し、思いがけず多くの子育て支援にかかわる方々と出会いました。その後、事業参加の有志が集まり、個人の資格で参加する「子育て王国」応援団を結成し、言い出しっぺの私が団長を務めています。平成20年5月、県の事業を引き継ぐ形で、総社市の「子育て王国そうじゃ」まちづくり実行委員会が結成され、市民団体代表として「子育て王国」応援団が重要な役割を担っています。

また、以前より総社市の小児科医3人で感染症情報を交換していましたが、これは有益な情報です。医師会の許可も得て医療関係者ばかりでなく、行政・保育・教育関係者・子育て支援者などに、メーリングリストで感染症情報を発信しています。このような事業の中で、行政・教育委員会・保育協議会などとの顔の見える関係づくりに務め、地域連携が出来上がりました。なお、総社市の小児科医3人は、いずれも子育てが終わった夫婦開業の女医です。「総社市のおばちゃん女医3人」として少しは活動を認められてきています。

私は、その時その時、できることを無理せずに医者をしてきました。やろうと思えばいつでも勉強はできますし、地域での活動も大切にしています。家族や患者さん、地域の皆さんの支えで今の私があると思っています。これからは次の世代を育て、恩返しをしたいと思っています。医者をしてきて良かったと心から思います。

第2回岡山MUSCATフォーラム いまを生きる ～求められる医療人の力～

倉敷廣済病院 江澤香代



2011年11月26日、第2回となる岡山MUSCATフォーラムが開催された。

予定時間通りに岡山大学病院院長・岡山大学理事の榎野博史先生のご挨拶で始まった。榎野先生は、「岡山大学第3内科では4割が女性医師であり臨床のみならず研究面でも女性の活躍は目覚ましい。今後も女性の復職支援が大切」と話された。次に、岡山県保健福祉部医療推進課課長の二宮忠矢先生は、「岡山県は医療先進県であり医師の数も全国平均を上回っているが県北の医師不足の課題がある。女性医師の割合はここ10年ほどで13.6%から16.9%へと増加しており県内医師の偏在をなくすためにも女性医師に期待する」と述べられた。続いて岡山県医師会会長の井戸俊夫先生は、「今年も秋の叙勲が決まったが、まだまだ女性の受章者は少ない。更なる努力が必要である。またブータン国王の来日を機に“幸福度”が話題になったが“幸福度”はその人の考え方1つだ。日本の医療満足度は低く、このようなフォーラムを通じて“幸福度”の考え方を伝えていきたい」と締めくくられた。

3人の先生方のご挨拶の後、岡山大学医療人キャリアセンター MUSCATセンター長の片岡仁美先生、岡山県医師会理事の神崎寛子先生、冒頭のご挨拶もされた岡山県保健福祉部医療推進課課長の二宮忠矢先生の3人の先生方より、平成19年の発足から現在へ至る経緯や、託児支援事業、Doctor's Career Cafe in OKAYAMA、Good Doctor の今年度の活動状況の報告がなされた。

引き続き特別講演に移った。まず、宮城県坂総合病院の内科医師 矢崎とも子先生の「医師として、母として、被災者として」。矢崎先生は3歳と7歳の子供さんのお母さん。東

日本大震災後の診療でご自身も被災者の立場でありながら診療を続け、嘔吐下痢やインフルエンザなどの感染症に苦勞されたり、写真を交えて大変貴重な震災の経験談をお話しされた。大変だったことは、医師として代われる人がいない、自分は頑張っても家に帰れない日が続くと2人の子供たちが参ってしまった、仕方なく病院に連れてきたが院内保育の申し出は却下された、などなど切実なお話が印象的だった。

感傷にひたり抜け出せないまま、もう1つの講演が始まった。兵庫県柏原病院小児科部長 和久祥三先生の「志を救われた泣き虫小児科医の話」。2007年春に丹波の地域から小児科・産科がなくなるかもしれない危機的状況の中から、心身ともに追いつめられている医師に気づき、理解し、立ち上がったお母さん。そこから始まる守る会の歩み。方法としては、井上孝代著“あの人と和解する”という本に出てくるトランセンド法というものを参考にした(お互いに利害関係のない仲介役の人に間に入ってもらうのだが、この場合メディアを利用したとのこと)。そして守る会の目的は、守る会がなくなっても存続できるよう行政でやっていけるようにすることだそうだ。講演の最後は小田和正の曲をBGMに、守る会がなかったらそこにいなかったであろう子供たちの写真で飾られた。会場が1つになっていた。

またまた感動冷めやらぬ中、パネルディスカッションが始まる。江澤による倉敷廣済病院の子育て支援に対する取り組みのご紹介、岡山大学産婦人科で正に子育て真っ最中の酒本あい先生の色々な工夫を凝らした奮闘記、岡山大学病院看護部本間雅子先生のEBN志向の次世代看護職教育システム開発の取り組みについてのお話が順次発表され、それぞれに興味深いものであった。ディスカッションの中では医学部の学生さんからも質問があり、それぞれの立場や経験をふまえて先生方も丁寧に答えられていた。

最後は岡山大学ダイバーシティ推進本部長 理事・副学長の許南浩先生よりご挨拶があった。私たちは、幼いころから男の子だから、女の子だからなど世の中のいろんなところで知らないうちに制限を受けている。男だから女だからではなく、障害があるからではなく、1人の人間として本来の自分がやりたいことが出来るような世の中にならなければならないと話された。

全体的に本当に中身の濃い素晴らしい3時間半でした。開催の準備に携われたスタッフの皆様、講師の先生方に心より御礼申し上げます。



◇シリーズ 女性医師支援 病院での取り組み◇

第7回

「女性医師支援
子育て支援を通じた笠岡第一病院での取り組み」

医療法人社団清和会笠岡第一病院 副理事長 小児科 宮島 裕子



笠岡第一病院は岡山県西南端の海とのどかな自然に囲まれた高齢化地域にあります。商業・生活圏はほぼ隣の広島県福山市、行政・医療は倉敷を中心とした岡山県南西部圏域と二面性のなかで仕事をおり、148床の急性期病院、附属診療所、透析クリニック、介護老人保健施設、健康増進クラブ等が電子化され、連携しています。常勤医は22名のうち女性が5名、非常勤医師30名のうち女性3名です。本来、医療業務は女性比率が高く、当院もパートを含めた全職員369人中女性は81.6%、中学生以下の子育て中の職員は37.4%（子供の総数272人）に達しています。都市部から離れた地方で専門職の多い医業を営むには離職者を最小限にとどめる必要性も高く、以前より様々な子育て支援を構築してきました。又、私自身が3人の子どもを育てた（というより彼らが自ら育ててくれたのが事実ですが。）経験から、親も子も共に育ちあえる欲張りな子育て支援を目指しています。具体的には下記のような支援であります。これらも含めて平成19年に岡山県「子育て応援宣言企業」に認定され初年度の県知事賞も頂きました。

①お父さん、お母さんの職場を体験しよう：わくわく・Work・笠岡第一病院探検隊！！

②勤務に関して：育児休暇取得100%

育児休暇復帰時の配慮（勤務部署、形態、勤務時間短縮、夜勤免除など）

③リフレッシュ休暇（全職員に年1回7日間連続休暇の設定）

④学校、幼稚園、保育園行事に休日希望や有給休暇を優先的に取得する配慮。

⑤保育料援助（親育ちの目的で院内保育を中止し地域保育園で保育料の1/2援助に変更）

⑥家族手当支援（18歳以下の扶養者一人あたりに月額6,000円支援）

⑦病児保育：生後6か月～小学3年生が対象（年間400人程度の利用）

⑧予防接種費用の援助（18歳以下の子どもに費用の1/2を補助）

地方ではありますが、昨年度は一日平均外来者500人、年間救急受け入れ850人、入院患者数2,800人（平均在院日数12.3日）と新患も多く症例も多彩です。一人医長の科もあり、医師一人ひとりに課せられる責任も重く、診断・治療の判断能力が磨かれる緊張の日々ですが、「とてもいい経験ができました。」と転職に際して話してくださる方も多くいます。

女性医師に関しては各人子育て・介護などさまざまな状況のなかで仕事を続けており、時にオンコールはありますが、当直・日直の減免・免除・勤務時間短縮もあり、子ども

の学校行事への参加、学会出張などにはできる限りの対応をしています。医師としてスタートを始めた若い時期には、子育てのマイナス要素ばかり目につきます。しかし、子どもを持つことで人間形成や教育問題・社会構造や環境問題など多くの学びの出発点となり、私自身、多忙を極めつつも自分育てのとてもよい機会であったと思います。

また、当院は出産後に復帰病院として派遣される女性医師が多いのも特徴と言えます。これまでに、皮膚科、眼科、小児科の医師の方々が生後6か月前後から初めての子育てをしながら勤務されてきました。中には岡山から、お子さんを病院が依頼した笠岡の保育所に預けた後に出勤されたり、体調不良時には院内の病児保育を利用されたりして、ほとんどの方が次の子どもの産休直前までけなげに頑張られました。そして確実に人として母としてさらに大きく成長される過程を見守らせていただいています。かつての反省やお子さんの心身ともに健やかな成長の願いも込めて、相談し合ったり、個々にできるだけ細やかな物心両面の対応を心がけています。平均年齢37歳で3世代同居のような年齢構成の当院では各年代層のワーク・ライフ・バランスのお手本が多くあり、具体的な将来像も把握でき、職域を越えて仕事との両立の相談や生活の知恵も授かりやすい雰囲気にあります。若い先生方もスタッフに子育て・介護の悩みなどを打ち明けたり、通園バッグや雑巾を縫ってもらったりもしている人もいます。

医師の社会はとかく「男性社会」と言われてきました。そして私達年代の女性医師はその中に溶け込み同等に働くことを善しとしてがむしゃらに頑張ってきたように思えます。時代がうつり、社会が多様化し女性の社会参加が一般化した現在では、教職・看護職等に比べて遅れている医師のワーク・ライフ・バランスを男女を問わず再構築する時期なのかもしれません。もちろん、医師としてのキャリアを積み、仕事への情熱と謙虚さを持って歩み続けるべきですが、それぞれのライフステージで自らギアチェンジできる勇気とそれに対応できる余裕のある医療現場を目指したいものです。

今、地方で医師不足が深刻になってきています。これは女性医師の早期離職と復職に関しての問題だけでなく、大きくは社会全体の価値観や研修医制度などとともに、卓近では、祝祭日・夜間の当直、救急診療など勤務状況が厳しくなりがちな私たち勤務医が年を重ねても馴染んできた現場で無理しすぎないで体力・気力に応じた働き方が選べる勤務医の環境作りなどの様々な問題の集大成のように思います。日々、医師がいきいきと明るく働きありさまを見て、次世代の子ども達が「お医者さんになりたい」と目を輝かせて言ってくれるような環境を知恵を出し合い作って行けたらと願っています。

